
律「最後の帰り道」

ニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

律「最後の帰り道」

【Nコード】

N4446Z

【作者名】

ニア

【あらすじ】

ネタバレ注意

本作品は、直接的ではありませんが映画けいおん！のネタバレを含んでおります。

未視聴の方はご注意ください。

卒業式の帰り道。

唯、紬、梓と別れて歩く律と澗。

だが律は何故か気分が晴れずにいた。

そんな中、別れ際に澗が律に伝えた言葉は……

「じゃあここでー！」

「うん、じゃあねりっちゃん、漣ちゃん」

「ああ、またな」

「じゃあな、気いつけて帰れよ」

「先輩たちもお気をつけて」

「じゃあね、二人とも……それじゃ行こっか、唯ちゃん、梓ちゃん」

「うん！あ、ムギちゃん。実はこの前駅前のケーキ屋さんで買ったイチゴショートのカリームがね……」

「唯先輩……またケーキの話ですか？」

「おーい、前見ながら歩かないと危ないぞ、って、聞こえてないなありゃ……まあいいや、じゃあ私達も行くか、漣」

「そうだな……」

そう言い、いつもの交差点で別れる私達。

今日は卒業式だったっていうのに、何の特別なこともない。ホント

私達はいつもと変わらないなと思わず破顔する。

危なっかしい足取りで歩いてきた唯が無事に横断歩道を渡りきったのを見届け、私は澗と歸路につく。

周りを見渡してみると、桜高の制服を着た姿はちらほら見かけるが、その中には三年生の姿は見受けられない。やはり卒業生同士で遊びにでも行っている人が多いのだろうか……？

(そういえば、バレー部の娘達は「これからカラオケに行くぞ〜！」って言ってたっけ？私達もどこかで遊んでから帰ればよかったか…

…？)

ふとそんな事を考えたが、もう唯達と別れてしまった後なのでもう後の祭りだ。

「ま、いつでも機会は作れるしな……」

「ん？どうかしたのか、律」

「んーん、どーもしない〜」

「？」

疑問符を浮かべる澗を誤魔化しつつ、私は笑顔を浮かべる。

そう、機会はまた作ればいい、これが最後の別れてわけじゃないんだから。

ただ

(この道で別れるのは、これが最後になるかもしれないんだよな…

…)

4月からは私達も大学生だ。あそこの大学は寮があるみたいだし、皆寮生活となるのだらう。こうして漣と二人のんびり歩く時間も

「こうして二人一緒に帰る機会も少なくなっていくのかな……？」

「うん……そうだな。大学行ったら授業もそれぞれ変則的になるだらうし」

漣も私と同じようなことを考えてたのだろうか？私の質問に漣は少しだけ寂しそうな表情を浮かべて答える。

同じ大学に通う　ああ確かにそれならば、皆で一緒にいられる時間も多くなるだらう。

だが、大学の授業は選択性だ。これまでのように同じ時間に登校し、同じ時間に帰宅することは難しくなる　学校自体が違う梓とは更に時間を合わせることも難しくなるだらうし……でもま、さっき自分でも「機会は作っていけばいい」って言ったじゃないか。部長としていくらでも皆で集まれるイベントを作っていけばいいさ！

（　　って、私はもう部長じゃないんだよな……）

そこら辺は新軽音部部长に頑張ってもらおうとするか。旅行の時もそうだったけど、梓のやつ、計画立てて何かをするのが好きそうだし。

（そういえば前に、唯の試験勉強のスケジュールを作ったこともあったけ……梓はアレで世話焼きな気質があるみたいだしな）

以前唯と梓が演芸大会に出た時のことを思い出しながら、私はウンウンと頷く。

……しかし、私の心は未だにすつきりしない。

皆で同じ大学に合格できた。梓もおそらく、来年は同じ大学を受験するのだろう。

桜高軽音部は 私達、放課後ティータイムはこれからもずっと一緒にいられるというのに……私の中のこのモヤモヤした気持ちはなんなのだろう……？

「と、もう着いちゃったか……」

そんな事を考えている間にもう澪の家に着いてしまった。考え事をして終わりとは、なんとも味気のない最後の帰り道になってしまった。

……しかし、ずっと考え事をしてた私が言うのも何だけど、澪のやつ、ほとんど話しかけて来なかったな……まあ、元々帰り道では私が話しかけることの方が多いんだが……

「じゃあな、澪！春休み中にはもう一度軽音部で集まりたいな。日取りとかはいつも通りメールで……」

「律……！」

「はいっ！？ って、いきなり大きな声出すなよ……」

「う、ごめん……」

急に大声を出した澪に驚く つか、怒られたのかと思って反射的に体が防御体制をとってしまったぜ……

当の澪は、緊張を解くように深呼吸を繰り返す……その目は真剣で、何か大切な事を伝えようとしているようで……

（はは〜ん、さては新しい詩でも思いついたか）

長い付き合いだから感じ取れる、漣の微妙な表情　伝えるのは恥ずかしいけれど、どうしても伝えたい事がある　そんな時の表情。

（こんな風に眉根を寄せて何かを言おうとしている時は大抵「律…あのさ　新しい詩を思いついたんだ！」って始まるからな〜）

おとなしいと思っただらまったく…梓への歌が完成したばかりなのに、漣の感受性の高さ、発想力には驚かされる。

…ただ、こういう時に出来上がるのは甘々〜な詩が多いんだよね…
でもまあ聞いてやりますか、漣がこうやって何かに大して積極的になってくれるのは嬉しいし。

そう…そんな何度も繰り返されてきたやり取りを想像していた私には

「律…あのさ　」

落ち着きを取り戻した漣が発した

「…ありがとうな」

「　ッ!？」

私への突然の感謝の言葉は、あまりにも衝撃的だった。

「な、何だよいきなり……」

「いきなり……だったかな？……でも、やっぱり今日伝えなくちゃいけないと思ってさ」

「はあ……」

戸惑う私のことなどお構いなしに、澪は言葉を続ける。

「……軽音部に入らなかったら 律が誘ってくれなかったら、こんな楽しい高校生活は送れなかったかもしれないって思ってたさ。そりゃ最初は強引に入部させられた形だけど、やっぱり私……音楽は好きだし……そのおかげでムギに唯、そして梓っていう素敵な仲間と出会うことができたしな……」

「べ、別に私はそんな大層なこと……悪ふざけが過ぎてあまり練習

にならない時もあつたし……」

「みんなを楽しませようとした結果だろう？ 普段からそうやって場を盛り上げてくれたことにはホント感謝してる……まあ、たまにやり過ぎなこともあつたけどさ」

「……………」

「なぐんで、どうせ『そんな臭い事言うなよ、痒くなる』って言われるのかもしれないけどさ、高校生最後の日だし、感謝の気持ちだけはちゃんと伝えておかなくちゃと思ってさ……」

「また熱く語ってしまった……」とでも思っているのだろうか、漣は頬を掻きながら照れ笑いを浮かべる。

ありがとう と感謝され、褒められているのだから、私は謙遜するか、喜ぶべきなのだろう。しかし、私は……未だ戸惑いを隠せず にいた。

だってな、漣……私はお前が思っているほど周りに気を遣ってたわけじゃないんだ……全部自分勝手にやってたことなんだよ。

皆を笑わせてたのだから、私自身が真面目なだけの部活にいたくないから いつでも皆が笑っていられる部活にしたかったから

自分勝手にそんな雰囲気になっていたんだ。

だから、そんな自分勝手だった私に感謝をされても……素直に喜んでいいのか分からない。

それに私は、皆の気持ちを確かめるのが怖かった……。

もしかしたらこんな風にふざけまわってる部活、ホントは皆嫌だったじゃないだろうか？ 皆、心のなかでは「もっと真面目に練習したい」と思っていたんじゃないだろうか？

自分勝手に皆を振り回している以上、一度皆に確認していくべきだったのだろう

……でも、怖かった。

……それを確かめるのが怖かった。

もし　もしそれを聞いて、「ホントは嫌だった」なんて言われたら……皆の前で同じように笑える自信がなかったから……私という存在自体を否定されたような気になるから。

先ほど感じた胸のもやもやはコレであったのだろう。

散々皆を振り回してきて、結局私は最後の日まで、皆の気持ちを確認することを避けてきたんだ

「それでな、律にひとつだけ聞いておきたいことがあってさ……」

「聞いておきたいこと……?」

そんな臆病者な私を尻目に、漣は

「……律はさ、この三年間楽しかった?」

私が怖くて聞けなかったことを、あっさりと聞いてくるのだった……

「……何でそんな事聞くの?」

まるで心を見透かされたかのようなタイミングの良い　あるいは
悪い漣の質問に、私はいよいよ戸惑いが隠せない。
漣はただ坦々と言葉を続ける。

「だってさ、そんな風に周りを盛り上げることばかり考えてて、肝心の律本人は楽しい高校生活をおくっていたのかな？って思ってた……そりゃいつもお前は笑ってはいたけど、心のなかでは気を遣い過ぎて疲れきってたんじゃないかって心配になってさ……」

「……………」

『当たり前だろう』とは即答出来なかった。

言葉に出したら、胸の内が溢れてきそうだから……涙が堪えられなくなるから。

だから私は、何度も　何度も頷く事で、その質問を肯定した。

楽しくなかったわけ……無いじゃないか。

毎日楽しく過ごせる仲間が増えて。

笑って

お茶して

バンドをして

おしゃべりして

ああ、自信を持って思えるよ　私の高校生活は、最っ高に楽しかった！　ってな。

（まったく……普段は引っ込み思案なくせに、こういう恥ずかしいことはストレートに言ってくるんだもん……）

「なあ、漣……私も一つ聞いてもいいかな？」

「うん？」

私の答えに安心した様子の親友に見習って、私も質問を返す。
臆病者の私が怖くてずっと聞けなかった質問を

「私……ちゃんと部長やれてたかな？皆は、桜高軽音部……楽しんでくれてたかな？」

声が震える……足腰も、気を張ってないと今にも崩れ落ちそう……
搾り出すようにして出た私の質問に、漣は最初驚いた様子ではあったが……

「ああ……」

すぐに笑顔になって頷いてくれた。

「最初はノリで『私が部長！』なんて言ってたけど……ホントは不安でいっぱいだし……」

気持ちを吐き出し始めたらしまらない……私は矢継ぎ早に漣に言葉を投げかける。

「特に梓が入ってから、先輩としてしっかりしてなきゃ なんて焦ることもあって……」

漣はただまっすぐ私を見つめながら、話を聞いてくれている。

「提出物はよく忘れるし、練習もまじめにしていなかったけど……そんな情けない部長のもとでも、皆楽しんで部活をすることができたかな……？」

「 当たり前だろう」

漣は……力強く、私の行いを肯定してくれた。

その言葉は私が本当に待ち望んでいたもので……怖くて怖くてきけなかった言葉で……

「そっかぁ……よかったぁ……」

「さつきも言っただろっ？律には感謝しているって……」

「うん……」

「私だけじゃない、唯もムギも梓も同じ気持ちだ。言っただらっ？『皆さんともっと演奏したいです』って」

「？ん……」

「もし楽しんでなかったらあんな事言わないよ。それに……まあ、これは私の個人的な意見になっちゃうんだが……」

「私は、みんなが笑顔でいるのを見て笑う律の笑顔が、大好きだったよ」

「ッ！！」

我慢の限界だった。

私は思わず漣に抱きついて溢れる涙を隠す。

そんな私を漣は優しく受け止めてくれた。

漣のどこか優しい匂いが私の鼻孔をくすぐる。

「律は桜高軽音部自慢の部長だったよ、だからさ……」

片手を私の頭の上に置く形で　まるで小さい子をあやすように、

漣は私を優しく抱きしめる。

「今は我慢しないでいいよ……唯もムギも梓もないから 私しかいないから、おもいきり泣いちゃってもいいんじゃないかな……」

「?ん……そうする……」

周囲の音はもう聞こえない。ただ私の嗚咽だけが響いていた

「なんだが、いつもと立場が逆だな。普段なら私がメソメソしていで、律がそれをなだめて……」

「メソメソって……自分で言うか?」

「ふふふ、校門で一度泣いてたおかげで吹っ切れてたのかも?」

「そりゃ〜たくましいこつて!」

あれから10分ほど時間が過ぎただろうか?

ようやく落ち着きを取り戻した私は、漣の家の扉に寄りかかる。

……鏡でみたらひどい顔になっているんだらうな……。

と、漣は何やら自分の鞆を漁り……

カシャッ

「ちよ、何だよ!？」

「律のレアな泣き顔ゲット!」

「ちよ、何を勝手に　ネガを渡せ〜っ!〜!」

「ハハ、や〜だよ!」

始まる追いかっこ。

ああ、やっぱり私はこうやって誰かとふざけあってるほうが性に合っている。

もうあんな情けない姿は見せないようにしよう……………漣の前以外では。

結局カメラは私が回収、現像した後該当部分のみ嚴重に私が保管することで追いかっこは終焉を迎えた。

「さて、カメラの件はいいとして……………よし、それじゃ早速漣の家におじゃまして、放課後ティータイム、次のライブ活動場所会議でもするか!」

「そうだな、私達が卒業しても『放課後ティータイム』は続いているんだから……………ある程度候補が決まったら皆にも相談して……………」

「まず第一候補としては〜そうだ!来月の桜高の新歓ライブに乱入して」

「いや、マズイだろうそれは……」

私の高校生活最後の帰り道は、こうして幕を終える。

終着地が自宅ではなく遷の家というのはなんと私らしい……
そんな事を考えていたら、自然と笑顔が溢れるのであった。

(後書き)

映画けいおん！を視聴し、書かずにはいられなかった本作品、いかがだったでしょうか？

書くにあたり、律と澪の性格をあえて本編の描写と逆にしていますので、違和感を覚える方もいらっしゃるかもしれませんが、私のイメージではこの二人は共依存的関係であると捉えていますので、たまにはこんな二人もありかと思えます。

今後は時間の許す限り投稿ペースを上げていければと思います。

よろしければ、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4446z/>

律「最後の帰り道」

2011年12月15日02時49分発行